
カミサマの行方

時遊 ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カミサマの行方

【Nコード】

N0401R

【作者名】

時遊 ユウ

【あらすじ】

『光に選ばれた少女は、仲間と共に神を探す旅に出たのです』

——いや、あり得ないから！！しかも旅の仲間って神様の部下なの！？もはやこれって最強じゃない！？私は普通の旅がしたいんだあああ！！

どうなるの

か作者にも先が見えてません……。さっぱりです。ゆっくり書いていきます。

伝説と旅の始まり

ある時、世界は大きな混乱に包まれた。世界を創り上げた四人の神々がその姿を消したのだ。彼らに付き従う多くの眷族たちでさえ、その行方を知らなかった。

神々が姿を消した影響で『世界の影』との境界が曖昧になり、闇に潜むモノ達がこちら側に紛れ込んだ。

人々は各地にいくつもの神殿を建て、神の再臨を祈った。

神々は姿を現さなかった。その代わりに希望の光が与えられた。

「光に選ばれた者がそれぞれの眷族達と共に我らの元にたどり着く……」

この言葉を聞いて神を探しに行く者もいたが、見つけ出すどころか手掛かりを掴むことさえ出来なかった。

そして眷族の長たちは眠りに就き、光に選ばれた者が現れるのを待ち続けているという…。

『レイド神話』より 海に囲まれた大地があった。レイドと呼ばれるこの土地は中央山脈によって気候・環境に違いがあり特色ある4つの地域に分かれている。

東には農業と牧畜が盛んなフーガル。

西には宝玉と磁器の産地であるトージ。

南の火山地帯フィアスは鉄鉱の街。

北には水路と商業の都ウォーリア、といった具合だ。

かつてはこれらの地域同士で争いを繰り返していた。しかし、戦争に嫌気がさした人々が平和を求めて立ち上がり、既に大きな戦争が起これらなくなって久しい。世界は安定を取り戻そうとしていた。

フーガルの北に優しい風が吹き抜ける小さな村があった。気さくで働き者の村人たちが住むこの村に、いつもと変わらない朝日が昇り、いつもと変わらないのんびりとした1日が始まるうとしていた。

そして1人の少女にとっては旅に出る特別な日だった。

「じゃあ、行つて来るね！」

明るい声が響き渡る。年の頃は16ぐらいだろうか。肩より少し短く明るい茶色の髪と、意志の強そうな瞳を持つ可憐な少女である。革のブーツと濃緑色のマントがよく似合っている。

「あんまり無理しちゃ駄目よーっ!!」

「大丈夫だって！そんなに心配しないでよ!!」

心配そうな母親の声を背に少女——ユリアは意気揚々と世界へと足を踏み出した。

——それが5時間程前の出来事だった。始まったばかりのユリアの旅は順調とは言えなかった。

「まっすぐ遺跡に向かつてたはず、だよな？」

現在彼女がいるのは薄暗い森の中である。『術師』になるために街道を外れてこの森に入ったのだが、どうも道に迷ってしまったようだ。

『術師』とはレイドを創ったとされる神々の力の片鱗を操る者のことである。

術師になるのに特別な素質や修行は要らない。遺跡と呼ばれる古

代の神殿で簡単な儀式を行い、一滴の血を捧げる。それだけで自分と相性の良い属性の術師になることが出来る。

属性には『火』『水』『風』『土』の四種類があり、術師の手の甲にはそれぞれの属性をかたどった紋章が現れる。

ただし術の発動には条件があり、術師になることで新たに生まれる危険もある。術師は最強という訳では無いのだ。

それらを承知したうえでユリアは遺跡に向かっていったのだが……。

「どこで道間違っただろう……」

不安げな呟きがこぼれ落ちる。

見渡す限り木、木、木である。遺跡の近くに何故か必ずある目印の白い石を探して歩き続けていたが、それもそろそろ限界に近い。俯いてしまう顔を上げてひたすら前を見据える。

——視線の先で何かが光った気がした。

慌てて目を凝らすと、低く張り出した枝の奥で何かが木漏れ日に照らされているようだ。夢中で駆け寄り枝をどけるとその先には、白い石が点々と並んでいた。

「あ、あつたーっ！！よかった、これさえ見つけたらもう迷わないで行ける」

張り詰めていた緊張の糸が緩んだのか、ユリアは泣き笑いを浮かべながら石を目印にして再び歩き始めた。

遺跡と儀式

その後は道に迷うことも無く10分程で遺跡にたどり着いた。最初に目指していた場所ではないものの、遺跡ということに変わりはない。

半地下の遺跡に入るとひんやりとした空気がユリアを包み込む。かつては人々の信仰の場として神と人とを繋いできたこの空間には、長い年月が経つても自然と背筋を伸ばしてしまう雰囲気が残っている。

ユリアはあらかじめ外で折って来た枝で中央にある祭壇の周りを丁寧に掃除すると、荷物を降ろし、村から持ってきた真つ白な器と穀物がはいった袋、そして小さなナイフを取り出した。

綺麗になった祭壇の中央に器を置き、器の東西南北に小さな穀物の山を一つずつ作る。準備が完了した。

静かに儀式が始まる。天井の隙間から微かな光が射し込む遺跡内部。静かな空間にユリアが詠唱する詩が響く。

「——響け、風に乗って 流れよ、水をたどって 拡がれ、火を纏って 眠れ、土に抱かれて」

一節ごとにそれぞれの山からひとつまみの穀物を器に移す。そして鞘から抜いたナイフを左手に握り、続ける。

「理の超越を求める我が存在を審査せよ 光を探し、証を刻め！」
詩が終わる瞬間人差し指に当たったナイフを思いっきり引いた。「っ——」冷たく鋭い痛みが指先に走る。真新しい傷口からはじわり、と深紅の血がにじみ出していた。ユリアは器の上に指をかざして血が落ちる時を待った。

——そして血が一滴落ちた。それを見ていたユリアの意識は急激に遠ざかって行った……。

謎の人物と光の術師

ユリアが意識を取り戻すと辺りがやけに眩しかった。——おかしいな、遺跡は薄暗かったのに。床も埃っぽくないし……ってあれ？異変を感じて、寝ぼけていた脳がようやく活動し始める。

「あれ？」

明らかに遺跡では無かった。見渡す限り辺りは純白。他に動くものも見当たらない。ユリアは混乱しながらも、取り敢えず今までの行動を振り返る。

「……何とか遺跡に着いて、掃除して、準備して、儀式を進めて儀式が終わって……？終わってどうしたわけ？」

「私がここに連れてきました」

「なっ……！？誰……！」

背後から声を掛けられて振り向くと、誰も居なかったはずの場所に笑顔で立っている人物の姿があった。

「んー誰と言われると困りますが……。そうですねえ、取り敢えずロッド、と名乗らせて頂きましょうか」

「名前じゃなくて……！何者なのか訊いてるの……！それにあなた今『連れてきた』って言った！どういう事なのか簡潔に説明しなさい……！」

一気にまくし立て、ロッドと名乗った人物を睨み付ける。

最初は術師かと思ったが見る限り手の甲に紋章は無い。薄墨色のつなぎにも特に特徴は無いし、微笑みを浮かべる顔に見覚えも無い。いきなりこんな所に連れて来られる意味が分からなかった。ロッドは視線に含まれる敵意に苦笑しながら言った。

「そんなに物騒な目で睨まなくても危害は加えませんよ。きちんと質問にも答えます。まず何者かという事ですが、レイド神話のこ

とは知っていますね？」

ロッドは逆にそんなことを訊いてきた。

「知ってるけど……」

警戒を解かないまま答える。レイド神話はレイドに住む人なら一度は聞く話だ。ユリアもよく母親から聞いたが、今この状況との関係が見えて来ない。

「話が早くて助かりますねえ。神話の冒頭に光に選ばれた者つてあるしょう？ほとんど知られていないですが、あれは光の術師のことなんです。で、その光の術師を導くために私が存在するんですよ。ここまでは大丈夫ですか？というようなロッドの表情。

「うん、敢えてどこにも突っ込まない。もう何となく展開が分かったけど一応訊いとく。何で私は連れて来られたの？」

話を聞きながら嫌な予感しかないユリアだったが、一番肝心な事を尋ねた。

「何でつて……貴女が光の術師だからですよ。どこかで待っている長達を全員見つけて、神々を探し出して下さいね！」

「ごめんなさい、ムリです、他を当たれ」

ロッドが『ね！』と言い終わるのとほぼ同時にお断りするユリア。まさに一刀両断。

「それは無理な相談ですねえ。もう儀式済んじやいましたし。紋章、出てるでしょう？」その返事もまた間髪入れない物だった。

ぎよつとして右手の甲を見ると、そこには二重の正方形を45度回して重ねた、シンプルで見たことの無い図形が色濃く浮かんでいた。

「……マジっすか」

「まじですねえ」

呆然としてロッドを見つめると、空気を読んでない笑顔を返された。

「~~~~っ！！だって光の術師なんて聞いたこと無いよっ！？」

…あつ、もしかしてこれ幻魔に凄い狙われるんじゃないっ！？」

「おや、ご名答。そこらの術師の比じゃないぐらい狙われますね

え
ー

珍しいですからねえアハハ、などと軽く言われてしまえば、もはや笑うしかない。

術師になるリスクで最も厄介なのが幻魔に襲われやすくなることだ。

深淵と呼ばれる世界の影から現れた生き物達を総称して幻魔という。人と共存している種もあるが、幻魔の多くは凶暴で人や家畜を襲う。ただの人よりも術師のほうが美味しらしく、強い術師ほど狙われる。力が強ければ強いほど危険度も増すのだ。一般的に紋章がはつきりしているほど術師の力は強い。

夢才チの期待と階段

そして、ユリアの紋章は今まで村で見たどんな術師のよりも鮮明に浮き出ている。

乾いた笑いを浮かべるユリアにロッドはさらに説明を加える。

「深淵との境界は神々が守っていたので、彼らを見つければ幻魔が増えることは無くなります。アナタの安全のためにも探して頂けませんか？」

「……はあ…神様を見つければいいんだよね？さつさと見つけて普通の旅するんだから！！」

半ばやけくそで叫ぶユリア。それを満足げに聞いていたロッド。

「——それはよかったです。では頑張つて下さい。運が良いことに一人目はココにいますよ。これも運命ですかねえ」 そう言いながら指を鳴らす。するとユリアの意識が一瞬遠くなり、気が付くと祭壇の前に立っていた。「……ここは…遺跡の中……？疲れて夢でも見てたのかな」

期待を込めてそつと右手を見るが夢才チではないようだ。

「はああ……。別に夢でよかったのに。っていうかさっきの人…ロッドだっけ、は一人目はココにいますか言ったけど、こんな何にもない所のどこにいるのよ」

ロッドに会う前と後で変わった様子は無さそうだ。

「でも何かさっきまでと違うような気が……」

辺りをよくよく見渡すと背後の壁が少し近くなっていた。祭壇が壁際に移動しているようだ。反対側に回ってみると、そこには地下に続く隠し階段があった。結構長いようで、階段の先は闇に包まれている。

「うわ、地下があるんだ。……これは降りろーっていう事か」

そう呟くと、荷物から夜光石という光る石を取り出して取っ手の付いたガラス瓶に詰める。簡易ライトは火種が要らないのが売りな

のでどこでも使うことが出来るようになっていた。辺りを柔らかく照らす光を見ていると、ある事実に気付き愕然とした。「そういえば発動詩全然知らない……」

物凄い勢いで顔が青ざめる。

「さっき訊いとけばよかった……!」

激しく後悔するが、もはや後の祭。術を使うために必要な発動詩を知らないと術師は何も出来ない。一般的に知られている四つの属性ならば発動詩が広く知られていて、それらをまとめた本なども出回っている。

しかし、ユリアの属性は光。おそらく存在と同様に発動詩も知られていないだろう。

「はぁ……。しょうがないか。取り敢えず降りてみよう」

そしてユリアは地下へと続く階段に足を踏み出した。

夢才チの期待と階段（後書き）

読んで下さっている方、本当にありがとうございます。長さも投稿日もまちまちですが、頑張って続けていきます。誤字脱字があれば是非教えて下さい。すぐに直します。

地下の小部屋と一つの決意と

——カッソ…カッソ…

ゆっくりとした足音が響き、仄かな光の中で影が揺れる。

造られてから長い年月が経っているであろう石の階段には傷んだ様子はなく、降りるのに十分な幅も取ってある。

地下に足を踏み入れてから数分、この先に何かがあるのか考えながら、ユリアは階段を一步一步慎重に進んでいた。

だいぶ時間を掛けて階段を降りきると、目の前に木で出来た重厚な扉が現れた。古びた扉の表面には風と光の紋章が刻み込まれている。

「……」

そつと押してみると、ユリアの紋章が一瞬輝きを放ち、すんなりと扉は開いた。

扉をくぐると、その先は小さな部屋になっていた。五歩も歩けば向かいの壁にたどり着くことが出来そうな狭さ。変わった所などどこにも無い普通の部屋。そんな部屋の中央で、支えも無しに浮かんでいる白い球体だけが現実離れしていた。

恐る恐る近付いてみると、球体はちょうど胸の辺りに浮いている。大きさは子供の頭ぐらいだろうか。先ほどは分からなかったが、その表面には文字が刻まれていた。

「『闇を払う目覚めの光よ 全ての希望へ輝きを 永き微睡みに終焉をもたらせ』これ、もしかしたら発動詩かもしれない……!!」

もう一度、文の最初に目をやるがそこには何も無かった。いつの間にか球体の表面から全ての文字が消え去っていた。「無くなってる……!というか、なんかさつきより透明になってる気がするし……ん?中に何か入ってる……これは…扇子?」

その瞬間、ほとんど透明になっていた球体がまばゆい輝きを放ち、幾千もの鈴のような音を出して砕けた。同時に立っていらなくなる程の突風が部屋を駆け巡る。

「きゃあああっつ！」 近くにいたユリアも勢いよく壁際まで吹き飛ばされ、身体中を壁や床に打ち付ける。転がったまま腕をかざして頭を庇いながら風を中心を見ようとするが、あまりに風が強すぎて目が開けられない。

ユリアはそのままじつと目を瞑って風が止むのを待つしか無かった。

しばらくして始まった時と同じように唐突に風は収まった。

耳元で鳴っていた風の音が不意に聞こえなくなって、恐る恐る目を開けると部屋は何事も無かったかのように静まり返っていた。

少し安心して、そもその原因である謎の球体があった所に恨めしげな顔を向けたが、その表情は一瞬で強張った。

「ど、どちら様？」

——視線の先には一人の若者の姿があった。

垂れ込める雲のような灰色の髪は、左側で一筋だけが編んで垂らされている。丈の短い着物を薄紅の帯で留め、着物と同じ素材で出来ているらしい膝下までのズボン穿いたその姿は、精悍な顔立ちと相まってユリアに若い牡鹿を思い起こさせた。

しばらく確かめるように身体を動かしていた若者だったが、壁際に固まっているユリアによりやく気付いたらしく、ちょっと驚いた顔をしておもむろに近付いて来た。

「キミが光の……？」

「えっ……あっハイ、そうらしいです。……あのー、もしかして風の長さんですか？」

物凄い風、突然現れた人物。思い当たるのはそれしかない。多少混乱していたとはいえ、どちらさま？などと呟いた自分を殴りたい気分だった。

「当たり前。俺は風の所で長やってたカイン。まあ、眷族の長っていうよりは補佐の色合いが強かったんだけど。あ、キミの名前は？伝説の光の術師さん」

（だいぶイメージと違う…何かこう、もう少し威厳とか……）
からかうように訊ねられ、想像とのあまりの差にくらくらする。

「ユリアです」

「そっか、よろしくなユリア。他の奴らはいないみたいだけど…俺だけ？」

「そうですね、カインさんが一人目です」

そう答えるとカインが妙な顔になり、明後日の方向を向いてしまった。

「あー、出来れば普通にタメ口で話してくれない？さん付けもしなくていいし。呼ばれ慣れてないからくすぐりたい」

「え、でも……」

戸惑うユリアだったが最終的には何だかんだでカインに押し切られてしまった。

「カインさ……カインは風の術師なの？」

もうあの部屋には用がないということで、地上へと戻る階段を昇りながらユリアは隣を歩くカインに訊ねた。

「そうだよ。ほら」

そう言っただけでカインは、歩きながら左手に巻いていた布をほどき、手の甲を見せてくれた。

「……紋章が光ってる……！」

細部まではつきりと浮かび上がったカインの紋章は暗闇の中でうつすらと燐光を放っていた。

「ああ、俺が風で最初の術師でそれなりに強いから」
紋章の濃さは強さと比例する。ならば光っていたら？

「…もしかしてカイン凄いい強かったりする？」

「純粹に力だけなら誰にも負けないと思う。もちろん風の中でね
他の属性の奴らも同じ。だからこそその補佐役だった訳だし」

あつさりと最強説を肯定されたが、話にはまだ続きがあった。

「だけど他の術師達と違って、俺達は人間に致命傷を与えることが出来ない。世界が簡単に壊れないようにそう決められてる。——
ここで問題。制約なしで俺達が世界とか人類とかを滅ぼそうと思つたらどのぐらい掛かると思う？」

急に問題を出されしばらく考えてから答える。

「一ヶ月…やっぱ二ヶ月ぐらいかな」

それでも常識はずれだなあと思つたが、実際はそれ以上だった。

「外れ。正解は一週間でした」

カインは嬉しそうに、とんでもない解答を口にした。

「まあ、そんなことにならないように制約があるんだけど……あれ、ユリアどうした？」

いつの間にかユリアが数段後ろで立ち止まっていた。

「……正直、いきなり神様探してーとか言われてもやる気なかったんだけど、なんていうか、話聞いてたら真面目にやらないとレイ
ドに大災害が起こりそうだし、頑張ることにする」

きよとんとしていたカインだったが、徐々に笑いが込み上げて来たらしく肩を震わせ始めた。

「そ、そっか！頑張ってくれるんだ、うん、凄く助かる、よ……！」

「え、あり得ない、何でここで笑うの！？感激の涙とかならともかく……！」

平静を装おつてはいるが、笑いを噛み殺しているのがバレバレである。

「笑つてない笑つてない！……っと、ほら外が見えた！早く行こ

う！」

「誤魔化すなー！！」

二人は騒ぎながら地下を後にした。

斜めな機嫌と動揺と

——ズツ…ズズツ……

「……ユリア、そっちももう少し押せる？」

地下から戻った二人は騒ぎにならないように、祭壇を動かして再び階段を隠していた。

「これでいいデスカ」

「……いいデス。やっぱり怒ってる？」

「イイエ、全く怒ってないデスよ」

「いや、絶対怒ってるよねー……。」

階段で宣言した「頑張ります」を笑われたことを根に持ったらしい。

そのせいか、さっきから会話ではわざとらしい敬語が使われている。
「……大体、人を笑ってはいけないと思いますよ。別にこれっぽっちも怒っていないデスカ」

大輪の花のような笑顔が怖い。カインは遺跡の温度が一気に下がった気がした。

荷物を片付けているユリアの背中に、状況を打開するべく声を掛ける。

「だってさー、真面目に言ってるのが分かるから、なんかこう微笑ましいっていうか、可愛いっていうか……」

ぴくん、とユリアの肩が揺れた。それに気付かずにカインは続ける。

「それにやる気が無いのにユリアは俺の所に来てくれたんだよね？
そついうのってやっぱ凄い嬉しいからさ。というわけであればユリ

アが可愛いくて笑ったんであつて馬鹿にして笑ったんじゃない——
ってどうしたのユリア！！顔真っ赤だよ！？大丈夫！？」

振り向いたユリアの顔は薄暗い遺跡の中でも分かるくらい赤くなっていた。「だ、大丈夫です。男の人からこんなに……か、可愛いとか言われたことないから……」

「あ、なるほど、ってええっ！？それはあり得ないでしょ！？あ、もしかしてユリアの村には女の人しかいなかったの？」

「え……うん、普通の村だったし、同じ年の男の子も何人もいたよ。でもあいつらより剣とかで強かったから、暴力女！——とか言われてよく絡まれてた。——まあ毎回ボコってたけど」

「あーなるほど。そういう事ね……」

動揺しているのか敬語を使うことをすっかり忘れているユリアだが、話を聞いたカインは大体の状況を把握する事が出来た。

つまり村の少年達はユリアのことが好きだったのだろう。が、そこは素直になれないお年頃。恋心はちょっかいを出すという形でしかユリアに伝えられなかったらしい。

「しかも全然気付いて無いみたいだしね……。ちょっと同情するな」

「カイン、今何が言った？」

「何でもないよ。あ、そうだ。次に行く所ってもう決めてたりする？」

「えっと、それなら、私が考えてた予定が、まずウォーリア行つて、その次にトージ、最後がフィアス、の順番でレイド一周するつもりだったの。だからそのまま予定通りでいいかなーと思うんだけど」

「うん、いいんじゃない。じゃあ次はウォーリアだね……あそこにいるのはアルマか」

そう呟くと、荷造りを終えたユリアと共に長い長い時間を過ごした遺跡を後にした。

——ユリアが怒りを忘れたことで、こっそりとガッツポーズをしていたのは秘密である。

斜めな機嫌と動揺と（後書き）

だいぶ間が空きましたがもう忘れられてますかね？
今回は短いですがまだまだ続けるつもりです。
よろしければお付き合い下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0401r/>

カミサマの行方

2011年5月21日10時46分発行